

序 文

柏木 哲夫

(日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団理事長)
金城学院大学学長

わが国のホスピス・緩和ケアの現状を概観する『ホスピス・緩和ケア白書』は、今回の2010年度版で7冊目になる。さまざまな課題を抱えながら日本のホスピス・緩和ケアの働きが着実に社会に根づきつつあることはご同慶の至りである。1970年代に始まった日本のホスピス運動は着実に広がり、ホスピス・緩和ケア病棟は2010年2月1日現在、195施設、3,834床になった。

『ホスピス緩和ケア白書』では、2004年にホスピス緩和ケアの取り組みの概況を俯瞰し、2005年ではホスピス緩和ケアの質の評価および関連学会・研究会の動向を紹介した。また、2006年は緩和ケアにおける教育と人材の育成をテーマに、2007年は緩和ケアにおける専門性、特に緩和ケアチームと緩和ケア病棟に焦点を当てた。2008年には緩和ケアにおける医療提供体制と地域ネットワークの状況をまとめ、2009年には緩和ケアの普及啓発・教育研修・臨床研究を取り上げるなど、わが国のホスピス緩和ケアの現状や進歩を概観できるように企画し、発行してきた。

さて、緩和ケアにおいてボランティアの役割の重要性は総論的に述べられてきているが、具体的な活動をまとめたものは少なかった。また、近年、緩和ケア病棟（ホスピス）のみならず緩和ケアチーム、在宅などでボランティアが導入されてきている。医療と生活をつなぐ緩和ケアでの多様な支援の形がみられるようになってきた。

また、ホスピス緩和ケアを支えるサポートグループも着実な支援活動を実践しており、現在どのようなサポートグループが、どのような展望をもってホスピス緩和ケアの一翼を担っているのかを把握する必要性も生じている。

ボランティアやサポートグループの活動は、総体的に明らかになっていないところもある。しかし、『ホスピス緩和ケア白書2010』でボランティアやサポートグループの現在の取り組みの状況を概観し、今後の在り方を探ることは、ホスピス緩和ケアの重要な側面を捉えることにつながると考え、今回のテーマを企画した。幸い多くの方に執筆していただき、とても内容の濃い白書になったと思っている。多くの方の参考になることを期待している。